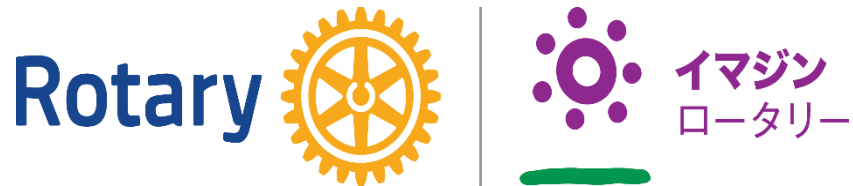


横浜鶴見北ロータリークラブ YOKOHAMA TSURUMI NORTH
2022年～2023年度 会長ターゲット
何事でも人々からして欲しいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ

週報第28号令和5年3月2日発行

2022年～2023年度 R. I. 会長テーマ



今週の一枚

横浜鶴見北ロータリークラブ

【事務局】横浜市鶴見区佃野町 18-11 エトワール鶴見 303号

TEL 045-575-1821 FAX 045-575-1822

Email ytnclub@gmail.com

HP <https://www.rotary-tsuruminorth.jp/>

【例会】毎週木曜日 12:30 場所 新横浜グレイスホテル

会長／石渡宏衛 副会長／赤塚一志 幹事／生方常明

第2349回例会 令和5年2月16日

斉唱 「四つのテスト」
ゲスト 画家 熊谷 直人様

会長報告

昨日、急ではありましたが、書面にて理事役員会を開催させていただき、トルコ南部大地震被災地支援についてご審議をいただきました。志村雄治ガバナーからの急なお申し出ではありましたが、被災地の状況を鑑み、また来週が祝日で例会が休会であること、地区の締め切りが迫っていることより牧井国際奉仕委員長とご相談の上、書面での理事会審議とさせていただきます。その結果、どなたからもご異論がありませんでしたので、本日の例会でニコニコボックスをお返しし、皆様からご寄付を募らせていただきたいと思います。

どうぞよろしく願いいたします。

そして後ほど幹事報告でもあると思いますが、小笠原さんがジュニア会員として入会され3年が経過しましたので、先週の理事役員会のご承認をいただき、正会員となりました。正会員になると会費が少し高くなるだけで無く、全ての例会への出席義務が生じます。出席できない場合は他クラブへのメイクアップなど出席補填が必要となります。どうぞよろしく願いいたします。

その理事役員会後、創立50周年の祝賀会となります横浜ベイコート倶楽部の方と渡辺50周年実行委員長と打ち合わせを行いました。色々詰めていかなくてならない事があり、これから何回か打ち合わせが必要となります。渡辺実行委員長をはじめ、実行委員の皆様にはどうぞよろしく願いいたします。

創立50周年の祝賀会ではロータリー財団平和フェローの深谷春奈さんに基調講演、先日例会で卓話を頂きました小澤瑠衣さんにサク

スの演奏をして頂くこととなりました。とても楽しみです。

また、50周年のチャリティーコンサート、祝賀会にご招待します来賓、他クラブの方々へのご案内の印刷、発送が今週から始まりました。こちらは雨宮さんが通常の業務に加えて、行っ

て頂いております、ありがとうございます。そして14日火曜日には米山学友のダンハイニュさんと渡辺さんでベトナムニャチャンでの国際奉仕活動についての打ち合わせをしました。ニャチャンでの手配をダンちゃんが、飛行機やホテルの手配を渡辺さんがして頂いております。まだまだ、参加者募集中ですので早めに渡辺さんにお申し出下さい。

本日は熊谷直人さんに卓話をお願いしております。熊谷さんどうぞよろしく願いいたします。

創立記念日

多田 信哉 会員（2月5日）

幹事報告

- (1) 先週の合同理事役員会の報告
- (2) 市立東高校支援への協賛
- (3) あざみRC卓話の紹介
- (4) ロータリー手帳申込
- (5) トルコ・シリア地震への義援金勧募

委員会報告

【牧井秀賢会員】

- ・トルコ大地震義援金について

【仲亀晃央会員】

- ・グループミーティング参加のお願い

【石渡会員・堀野会員・松田会員】

- ・地区委員委嘱状

出席報告

会員総数 32名
今回暫定 27 / 32 = 87.09%
前々回確定 28 / 32 = 87.5%

ニコニコBOX

(クラブ会員の為、敬称略)

石渡 宏衛 熊谷さん卓話楽しみにしています。又、チェンマー一緒に行きましょう。

生方 常明 ここしばらくアオイは受験で色々大変そうです。合格したら金の工面が大変です。

赤塚 一志 熊谷直人様、本日は興味を持って楽しみに拝聴いたします。

上原 良廣 熊谷様、本日は有難うございます。楽しいお話期待しています。

松田 啓 芸大のお話興味あります。楽しみにしております。

宮田 豊和 熊谷様、卓話ありがとうございます。画家の世界や東京芸大の世界についてご教授下さい。楽しみに拝聴いたします。

天野 直樹 熊谷様、画家のお話を伺う初めての機会になります。大変楽しみにしております。腰痛がようやく治りました。ようやくゴルフが出来ます。打倒宮田さん！

北村 藍 熊谷さん、画家をお仕事とされている方のお話とても貴重なものとして拝聴させていただきます。学ばせていただきます。

藤林 直美 熊谷様、今日の卓話興味あるお話で楽しみにしております。

加藤 進 熊谷様、楽しいお話ありがとうございます。

上澤摩壽雄 本日の卓話楽しみに拝聴させていただきます。

堀野 弘樹 熊谷様、本日は卓話ありがとうございます。拝聴させていただきます。

長澤 尚明 熊谷様、本日は卓話ありがとうございます。楽しみに拝聴させていただきます。

以下同内容の為お名前のみ（敬称略）

田邊勝久 晝間勝 合谷保爾 今井新一郎
仲亀晃央 祝康一 鈴木元一郎 松阪脩平
多田信哉 佐久間務 牧井秀賢 小笠原憲介

卓話

「日本で画家を志す若者たちと 東京芸大の話」



画家 熊谷 直人様

こんにちは、熊谷直人と申します。本日はよろしく願いいたします。先ほどご紹介いただきました通り、私は画家をしています。画家の仕事というと皆さんはどのようなイメージでしょうか？絵を描いて展覧会を開催するのはもちろんですが、他にもホテルや病院などの公共施設に飾る絵画を制作したり、個人注文を受けて住居にかざる作品を制作したり、作品が本の装丁やポスターなどに使用されたり。と意外と様々な形で自分の作品を社会に発表しています。そんな画家の仕事に加えて、私は週に2日大学で芸術を学ぶ学生にデッサンや絵画制作の授業を行なっています。いわゆる美術教育の分野でも活動しています。

今日は私の仕事である画家と美術教育の二つに関わるお話をさせていただきたいと思いません。タイトルは、『日本で画家を志す若者達と東京芸大の話』としました。

画家を志す若者は皆さんのお知り合いにいらっしゃいますか？あまり見かけないかもしれませんが、おそらく皆さんが漠然とイメージされるよりは、そういった若者達はたくさんいると思います。今日のお話は、そんな画家や芸術家を志す若者達の多くが、芸術家人生スタートしてから受験や学生生活の中でどのような現実の中で過ごし芸術の世界を目指すのか、というお話を、私の出身大学である東京芸術大学の油画科を例にお話ししようと思います。

最近では社会的にアートへの関心が高まり、以前に比べ若い世代や経営者の方々などを中心に美術作品を手にとる方が増えているように思います。私自身も自分の作品に関心を持っていたり手に取っていただく方が多くなっているように感じています。そんなこともあり、社会的に成功を収めている芸術家達の過去の歩みやエピソードはネットや様々なメディアでたくさん目にする事ができます。そんな華やかに見える世界の手前で、実は多くの人間が若い頃から自分と闘い切磋琢磨しながら芸術の世界を目指しています。今日はそういった表に出ない部分を、受験生、大学生、予備校講師、大学講師、画家という様々な立場から見えてきた私自身の体験を中心にお話ししてみようと思います。

世間的にはあまり知られていませんが、芸術系の受験、そして芸術家になるための学生生活というのはなかなか特殊な世界なので、皆様にも興味を持って聞いていただけるんじゃないかと思いません。また万が一、将来みなさまご自身やお子さんお孫さんなど身内の方が芸術を志す時が来たら今日のお話はとても役に立つんじゃないかと思いません。後半には時間の許す限り、私個人の作品紹介もさせていただこうと思っています。

日本で画家を志す若者のほとんどはまず芸術大学、美術大学や専門学校などで学ぶことを考える人が多いと思います。その中でも東京芸術大学、通称 東京芸大は最も格式が高く有名で入学するのが難しいと言われています。卒業生には有名なところで、古くは横山大観、岡本太郎、現役で活躍されている方ですと村上隆さん、音楽の方ですと坂本龍一さんなど著名な方々がたくさんいらっしゃいます。芸術系の東大なんて言われることもあります。中でも油画科は倍率、入試内容ともに難関と言われます。合格倍率は最新のもので17・3倍です。一般的な大学入試の倍率としてはかなり高いです。でも倍率以上に難しいと言われるのがその試験内容です。一般的な大学と同じような学科の試験に加え実技の試験があるんですが、芸大油画科の場合は実技がメインとされています。実技は1次と2次があるのですがどちらも、一般的な学科試験と同じように、当日会場に行って試験問題が出てそれに対してはデッサンや油絵を描いて解答として提出し採点され合否が決まるという形式です。

これから実際に過去10年の間に出題された問題を芸大のホームページから抜粋してきたので、いくつかおみせしますので、よかったら皆さん自身が受験する気持ちになって自分だったらどんな作品を描くか考えながらきいてください。(ここから過去10年の入試問題をスライドで提示)

どうでしょうか？どの問題も一筋縄では行かない難しそうなものですが、受験生にとっては、それより厄介なのは毎年問題内容が大きく変わるという点です。加えてここには書いていませんが使用する画材や画面サイズ、制作時間も変化します。比較のために他大学のお話ししますと、例えば多摩美術大学は人物や言葉によるイメージ課題、武蔵野美術大学は静物と言った感じに、他大学は入試問題の傾向がある程度決まっているので、受験生はそれを参考に人物なり静物の実力を事前に思う存分磨いて入試に挑むことができるわけで

すが、芸大はそれがやりにくいことが、入試を倍率以上に 難関にしているわけです。

と、ここまでお話ししたんですが、今回お話しするにあたり、私は芸大のホームページや入試説明会の動画を見て、「芸大は随分常識的で受験生に優しくなったなあ」と思いました。これはどういうことかという、古い話になって恐縮ですが、私が 受験していた 1990 年代頃の芸大 受験はさらに過酷で、今思えば、あれは若者の未来を左右する大学受験として体をなしていたのか？と個人的には思えるようなものだったんです。

(過去の芸大受験についてのエピソード)

このような形で芸大は受験生たちの年によって大きく変化する芸大油画科の入試問題に健気に食らいつくという時代が続いていたわけです。 頑張って絵を描く実力をつけたからといって必ずそれが報われる、というものでもありません。その年の入試問題と自分の得意分野や技法の相性という、 ある意味運の要素が合否に影響しやすくなる。そうなるといくら努力しても 2 浪や 3 浪じゃ済まない人も出てきます。私の同級生には 6 浪の人もありました。ただし、今考えるとそのような幅広い世代が同級生として付き合えるというのはものを作る人間としてはいい環境ではあったと思います。ここで受験生時代の私の作品をいくつかおみせします。

(受験時代の作品をスライドで解説)

話を戻します。先ほどお話ししたような過酷な受験をようやく乗り越えて大学にいざ入学しますとどんな生活が待っているか。ここからは私が実際に学生として過ごしていた 2000 年代の東京芸大のお話になります。芸大は仮にも日本一と言われる大学ですから、どんなことを教えてもらえるのかと難関を乗り越えた 55 人の若者たちが意気揚々と入学してくるわけですが、当時はよく言えば自由、悪く言えば放置でした。年に何回か作品講評会はあるのですが一部の授業を除いては制作中に先生方がアトリエに来ることはあまりありませんでした。学生とい

うよりは一人の芸術家として環境だけを与えられると言った感じで、自分で自分をマネジメントして 制作に励むことが中心となります。そんな環境ですので、四年間の間にふるいにかけてられるところもあって、卒業が近づくころには、 黙々と制作や研究に励む学生もいれば、あまり制作しなかったり、大学に来なくなる学生もいました。自分で考えて作品を作ることが本当に好きな学生には素晴らしい環境だと思いますが、そうではない学生にとっては、制作に打ち込むことが自分にとって本当に必要なのか？そんな問いを突きつけられるような面もあったかと想像します。

以前「芸大油画科の卒業生は卒業後に消息不明になる人が多い」というちょっと失礼な都市伝説を耳にしたことがあります。さすがにそれは大げさだと思いますが、卒業後の進路が一般的な大学と違って特殊なのは事実で、就職活動して就職する人が極端に少ないというのはありました。私の学年で言えば、卒業後の進路希望は大学院への進学が七割～八割くらい、一割くらいがゲーム会社や美術教師、絵の具会社などに就職、のこりはアルバイトしながら作品制作というのが、私の体感的なイメージです。大学院希望が多い理由を想像すると、作家を本気で目指す学生はもちろん、そこまででもない学生も国立大学の安い学費を払って広いアトリエと 2 年間の猶予期間を得られるというのが大きいと思います。

芸大は卒業時に卒業論文の代わりに卒業制作と言って作品を制作してその作品を集めて卒業制作展をします。その卒業制作が大学院の試験を兼ねているんですが、それとは別に作家を目指す学生にとってある意味就職活動のような機能を持ってました。どういうことかという、普段は作品を見せられない、ギャラリーやコレクター、美術関係者が展示に来るわけです。自分の作品がそういう人たちの目に止まると、作品が買われたりギャラリーにスカウトされたりして作家として社会に出るチャンスを手に入れるわけですね。

ごく一部の学生はそれをきっかけに大学院の二年間の間に作家として成長して大学院の修了と同時に作家として世に出たり、それと合わせて学年で数名の枠を勝ち取って博士課程に進学したりします。これは順調な例ですが、大多数の学生はそうはいかず、言い方が悪いですが、大学院修了と同時に世の中に出て行きま

す。そこからは個人差がありますが、働きながら制作を続けたり、お金を貯めて海外に出て作家として芽が出るまで頑張る人が多いわけですが、そこから社会的に成功するのはごく一部で、多くは大体30~35歳くらいまでで徐々に制作をしなくなることが多いと思います。いろいろ理由はありますが、大学を出るとアトリエがなくなったり、発表の機会が減ったりという様々な理由が重なり、活動を続けるのが本当に難しいのかと思います。

私はもうすぐ45歳になるんですが、この歳まで幸運にも画家として活動していますが、大学の同級生について考えてみると、コンスタントに作家活動しているのが情報として耳に入ってくるのは55人のうち10人もいないんじゃないかなというのが現実です。

ただ、こんな話をするとなんだかネガティブな話に聞こえますが、別にそういう側面だけでもないかと思っています。作家にならなくても、就職して結婚し安定した生活を手に入れたり、地元に戻って実家の家業を継いだり、芸大で学んだ感性を生かして他の仕事をしたり作品発表はせずに作品制作をしたりと、それぞれにいろいろな道で充実した人生を歩んでいるという面もあると思います。

最初に、芸術家を志す若者達はおそらく皆さんがイメージするよりたくさんいるとおもいます。と言いました。その言葉には続きがあつて、志す若者達は意外と多い。ただ、それを実現して画家として生活していく人はとても少ない。ということは今日お話ししたような現実があるからです。

しかしながら、自分の手で作品を作り出すという行為は、本当にやりがいと充実感があつてすばらしい時間です。だからこそ、あれほど過酷な受験やその後の作家を続けるという困難に多くの若者が純粋に人生をかけて挑み続けているし、私自身もこれからも作り手として同じように純粋に挑戦し続けたいと強く思っています。

ここからの時間は最後に私個人の作品を少し紹介させていただきたいと思います。(スライドで作品を提示して作品解説。)
私の制作の大きなテーマは自然です。自然といっても自然物の姿形をそのまま描くということではありません。『自然な状態』をモチーフにしているという言い方が近いと思います。一つ例を出すなら一粒の種子がある場所にポトンと落ちた時、その場所の光の位置や水の量や温度、他の植物や生物との関わりなど、その場の環境に応じて、生きるのに必要な形を備えながら固有の姿に成長していく。種子が元々持っている個性と環境が一体化して固有の必然的な姿になる。それを私は『自然な状態』と考えていて、そんな植物の存在の仕方、在り方をモチーフとして考えています。

そんな「自然な状態」を絵画に取り入れるために私がこだわっているのは素材です。油絵具を中心に使っているにですが、キャンバス、布、木、紙、石など様々なものに描きます。具体的な制作方法や考え方は作品ごとに毎回いろいろと実験を繰り返しながら制作しています。(スライドを見ながらの個別の作品紹介)

本日の前半は芸術を志す多くの若者達が受験や学生生活、その後の活動の中で目の当たりにする現実について、後半は私自身の作品についてお話しをさせていただきました。今回は私個人の作品についてお話しする時間は短かったですが、今回こうして皆様とご縁をいただきましたので、またいつか展覧会などで私の作品を直に体験していただけたら嬉しいなと思っています。本日はありがとうございました。